『こころの科学とエピステモロジー』*Vol. 5*, 93 - 101, 2023
https://sites.google.com/site/epistemologymindscience/

コメント論文

他者問題とその無限の射程：西研の反批判に答える

渡辺恒夫[1]

はじめに

西研さんから、その著『哲学は対話する』[1]への筆者の書評（本誌 Vol.2）[2]に対する反論記事「「他者問題を正しく立てる」とはどういうことか？――渡辺恒夫からの批判に答える」をいただいた（本誌 Vol.4）[3]。大学関連の制度的改革に携わるなど激務の中、2 年越しで、それもかなり長い返答を書いて下さった、その誠意にまず感謝したい。

さて、(以下に敬称を略す) 西の記事を一読して筆者は、突っ込みどころを見つけたので反論を書くと、個人的にメールを送ったのだった。それに対して西からは、突っ込んでいてはお互いに疲れるばかりなので、他者問題の重要さを正面から書いたらどうか、渡辺さんの他者問題にはわからないところがあり、答えの無い形而上学的な問題を立てているような気がするから、といった趣旨の返事がきた（4/26 personal e-mail)。もっともなことでもあるし、読者に論争の前提になっている記事をいちいち参照せよと言う手間も省けるので、提案にしたがって本稿も「他者問題とその無限の射程」と題した。だから、前号の西の記事もその前の筆者の書評も読まずとも、独立に理解できる記事になるようこころがけたつもりである（その代り、西の記事の熱心な読者からすれば、反論に直接答えていないところがあるように見えるという難点もあるが)。

なお、西の提案に十分に答えるには 13000 字以内というコメント論文の範囲では不可能と分かったので、研究随想という形での続篇を付けておいた。併せて読んでいただきたい[2]。

便宜のため、本篇続篇を通じての目次を示しておく。

＜目次＞

１．他者問題には幼稚園から大学院まである
２．「主客問題」は終わった問題ではないかという疑念
　2.1　主客問題がバカバカしく感じられる「現象学的な」根拠
　2.2　実験現象学者が研究した「アモーダル知覚」
　2.3　主客問題は「オワコン」

---

[1] 東邦大学名誉教授。心理学・現象学。近著に『明日からネットで始める現象学：夢分析からコミュ障当事者研究まで』新曜社、2021。

[2] 個人的なことになるが、西の提案に乗る気になったのは、長い研究ライフにもそろそろ終りが見えていることもある。筆者が初めて論文を書いて公刊したのは哲学専攻の学部学生だった頃、「渡辺恒人」名義での懸賞論文だったが、そのものズバリ「他人の存在をめぐる論争」という題であった[4]。そののち長い空白があったが、半世紀以上前の最初の問題意識がどのように変化したか、そろそろケリをつけたいという気持ちがあった。

３．「他者問題」はこれからの問題である
3.1　発達研究における「物の実在」の基準
3.2　他者問題の難問性はそれが自他問題であり「自己」の問題であるところにある
＜以下は「他者問題とその無限の射程（続篇）」[5]＞
１．他者問題史をふりかえると‥‥
1.1　他者認識の哲学史を、他者理解・認知の心理学史が１世紀近く遅れてなぞっている
1.2　他者の直接知覚説
1.3　超越説ーサルトルによれば他者は「世界外」から「まなざし」て来る
２．自我体験と独我論的体験ー自己理解も他者理解も終わりなき階梯を成す
2.1　研究誘発事例との遭遇から
2.2　研究に当たっての態度・方法
2.3　発達モデルの構想ー自己理解も他者理解も終わりなき階梯を成す
2.4　単線型発達観から多型分岐型発達観へ
３．自明性のかなたへ
3.1　「聖者」と「悪魔の医師」における他者理解の「個人差」
3.2　他者理解の「目標」は何か
3.3　ネーゲルのいう独我論の陥穽をフッサール想像論から再解釈すると
3.4　トロイアの王妃ヘカベの体験世界はどのような意味で「実在」したのか？
3.5　共感的想像力が想像（ファンタジー）にすり替わるとき
４．共同研究への誘い

１．他者問題には幼稚園から大学院まである

他者問題には、ほかの哲学・認知科学上の問題、例えば心身問題に比べればわかりにくいところがある。これは西も引用している拙著[6]の「付章：他者問題超入門」の冒頭でも述べたところだ。けれど、そこではあえて書かなかったのだが、他者問題には「幼稚園から大学院まである」。それが、分かりにくさの一因になっていると思われるのだ。

この言い方は、筆者が大学院生時代に京都のヨーガ・アシュラムに通っていて故・佐保田鶴治師から聞いた、「禅には大学しかないが、ヨーガには幼稚園から大学院まである」の言葉を元にしている。禅は最初から悟りを目標にしているから敷居が高い。これに対してヨーガは、美容や健康に終始してもそれなりに意義のあることだし、その中でもっと高い目標に気づいて「進学」してくれる人がいればなお良い、といった話だったと覚えている。けれど、幼稚園はさすがにどうかと思うので、とりあえず他者問題には「義務教育」段階と「高等教育」段階がある、と言っておこう。

義務教育段階とは、誰でも立てられる他者問題のことである。現に、認知発達研究では他者問題は「他者理解」「他者認知」「社会的認知」の問題として、いまや花盛りだ。それらの研究には共通項がある。それは、研究者が他者の存在を最初から自明のものとして前提したまま、他者認知・理解の発生発達やメカニズムの問題に取り組んでいることだ。この意味での他者問題は、実際上、誰

でも研究できるように、**一見、思われる**。

これに対して、誰にもできるわけではないことは、他者の存在をエポケーし、カッコにいれ、現象学的に還元してから、他者認知・理解の問題に取り組むことだ。この場合、舞台は発達心理学などの経験科学的領域からより哲学的な領域に移り、「他者認識」問題と言われることになる。他者の存在をカッコ入れするとは、デカルトの方法的懐疑と同じく、方法的に独我論を取ることだ。フッサールは超越論的現象学を方法的独我論と呼んでいる。だからこれは、「義務教育」を終えてから取りかからなければならない。ただし、ここでいう義務教育高等教育とは、実年齢も学歴も人生経験も本質的には関係がないし、加えて、心理学的他者理解問題と哲学的他者認識問題は、複雑に絡み合っていて截然とは切り離せないので、話が複雑になる。

他者の存在をエポケーせずに立てる他者問題の研究のどこが悪いのか、他者の存在は自明のことではないか、と反問されるかもしれない。これに対しては、第一に、そのような研究は論点先取の誤謬におちいってしまうからだ、という答えがありうる。けれども反論者は、論点を先取せずに問題を立てられないところにこそ、他者の自明性があるのではないかと言うかもしれない。

けれども、第二の問題、あまり今まで論じられてこなかった問題がある。それは、認識し理解すべき肝腎の「他者」というものの正体が、よく分からないということだ。自明だと思っていた他者というものが、実は自明ではないのだ（先回りして言うと、他者問題とは自他問題であって、かんじんの「自己」が自明でないからなのだ）。この点を明らかにするために、「他者問題」と、西の重視する「主観客観の一致の問題」（「主客問題」、「主客の難問」ともいう）とを、比較することから始めて見よう。

２．「主客問題」は終わった問題ではないかという疑念

2.1　主客問題がバカバカしく感じられる「現象学的な」根拠

西の記事に直接突っ込まないことにしたとはいえ、主客問題と他者問題を比較するうえで効果的と思うので、一点だけ突っ込むことを許していただきたい。

まず、西の記事の冒頭部分を引用しよう。

「‥‥私はこのように述べた。「客観的世界との一致は不可能ということを認めた上で、『合理的な根拠をもって人びとの間で共有しうる知＝合理的な共通了解』はありうるはずであり、この合理的な共通了解が成立するための条件を明確にすることができるという‥‥現象学はまさにこの立場をとろうとする」[1] (p. 241)／この私の主張に対して、渡辺は次のようにいう。「これでは前門の狼（＝主客の難問）を追い払うために、後門から虎（＝自他の難問）を導き入れることになってしまうではないか。共通了解が成立するには自他の同型性への確信が前提となるが、主客一致問題より自他同型性問題がやさしいという保証はないからだ」[2](p.94)。／私なりに渡辺の批判を言い直してみると、〈客観との一致を廃するといっても、合理的な共通了解をめざすというときに、すでに、自他の同型性が前提になっている。自他の同型性じたいが疑わしい（問題的な事柄）であるのに、それが前提になっているのはまずい〉ということだろう。／しかしこの批判に出会ったときの私の率直な感想は、「そもそも自他の同型性を〝証明〟しなくてはならないのか？　しかもわざわざ、

「物しか存在しない世界」を前提した上で？」というものだった。」[3]（p. 64）

さて、まぜっかえし的になるが、この反批判を読んだ時の筆者の率直な感想は、「そもそも主観客観の一致の問題こそ〝証明〟しなくてはならないのか、それこそわざわざ共通了解なんてことを持ち出さなくたって自明ではないか？」というものだったのだ。

実はこの点は、西も気にしているフシがあって、読ませていただいた『100 分 de 名著　カント純粋理性批判』[7]にも、（人に貸して手元にないので）記憶をたどって引用すると、主客一致の問題などバカバカしいと思う人もいるだろうと書いてあり、けれど次のように考えたらどうか‥‥とあって、カント哲学の解説が続いている。筆者はカントに暗いのでこれには何も言えないが、というかそもそも哲学専攻の学部生だった筆者がカントに興味を持てなかったのは、主客一致のようなバカバカしい問題にばかりかかずらわっていて、真の難問である他者という問題意識が見られない、という理由だったのだ。

じっさい、哲学者ならぬ普通の人々にとって、「花瓶の知覚表象という主観と花瓶そのものの客観的実在は果たして一致するのか、たとえば目のまえの花瓶の知覚できない背面は実在するとなぜいえるのか」といった主客問題は、自分とは縁遠いバカバカしい問題にしか思えないだろう[1]。

では、なぜバカバカしく感じられるのか。「常識的日常的に自明だから」という以上の根拠はあるのか。実は現象学がすでに、このバカバカしいという感じの根拠を**現象学的に**解明しているのだ。フッサールではない。そもそも現象学「哲学者」でもない。心理学史の方に名前が出てくるベルギーの実験現象学者ミショットが始めた「アモーダル知覚」（amodal perception：感覚様相なき知覚；非感性的知覚）の実験的研究がそれである。

2.2　実験現象学者が研究した「アモーダル知覚」

まず、アモーダル知覚の実験図解を示そう（[10] (p.26), [11] (p.44)）。

「Fig.8」で、左から時系列的に、円の左側が徐々に欠けて、右端のような小部分になって最後は消失するような動画をスクリーンに提示する。すると観察者はほぼ例外なく、円が、目に見えない「遮蔽物」によって左から徐々に

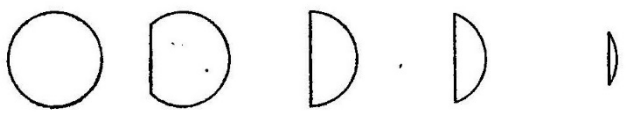

Fig. 8

[1] 他者問題も一般にはバカバカしく感じられるだろうか。発達心理学者の V. レディは「他者の心を知る」という講義での経験をこう述べている「彼らは心の私事性（プラバイバシー）には何の疑いもなく確信していたが、同時に、対人的理解の可能性には深く依存しており、心の存在を（自分自身の論理に従いながらも）疑わねばならないというばかばかしさには呆れ果てるのであった。」[8](p.16)。

ところが認知哲学者のデネットは、やはり講義での経験をこう語っている。「もしかすると，（極端な場合を考えれば）あなただけがこの世のなかの唯一の心であるかもしれない。‥‥この奇妙な考えは，幼かったわたしの頭にも浮かんだことがある。あるいは，あなたの頭にも同じことが浮かんだかもしれない。わたしの学生の三分の一ぐらいのものも，子どものころに同じことを考えつき，その考えにとりつかれてしまったと言っているが，このような考え方は哲学的な仮説としてはきわめて一般的で，（「自分ひとり」という意味のラテン語 solipsis に由来して）「独我論（ソリプシズム）」と呼ばれている」[9](p.11)。つまり他者問題への感じ方には個人差が大きいのだ。筆者が学生への調査を通じて得た印象では、バカバカしいというより「アブナイ」と感じられるようである。

覆い隠されてゆくという印象を報告する。円が欠けて半円になって最後は消えるなどと言う報告は、まずお目にかからない。この覆い隠されるという印象は半強制的といってよいほど鮮やかなもので、推論の結果とは考えにくい。これをミショットは、対応する感覚刺激なくして生じる知覚印象、つまり感覚様相なき(amodal)知覚と呼んだのである（“modality”は視聴触等の具体的な感覚様相のことだから、否定の接頭辞 “a”がついて「amodal＝感覚様相を欠いた」となる。「非感性的知覚」の訳語もある。）。

私事にわたって恐縮であるが、筆者は大学院進学の時に専攻を哲学から心理学に変え、修士論文のため仮現運動の実験に携わるうちに、偶然これと同じ現象を見つけた。話を聞いた当時の指導教官の柿崎祐一教授が、参考にと教えてくれたのが、このミショットらの論文[10]であった。

その後、筆者自身は実験研究から離れてしまったが、アモーダル知覚というテーマは 20 世紀の末頃から、実験現象学の枠組みを離れて認知科学・認知哲学のなかで展開されるにいたる（簡単な紹介は[11]（訳者解題）参照のこと）。このアモーダル知覚が、現象学哲学と認知哲学にとって重要な問題を提起することは疑えない。なぜならアモーダル知覚の概念は、物体の部分が他の部分によって完全に隠された、花瓶の背面のような対象へも適用できるからだ[12]。これは、直接経験を超えた存在をどうして認識できるかという、西のいう主客問題にも直接関係して来る。論争の一端を紹介するならば、Nanay [12] [13]によると、アモーダル知覚の説明として、(1)推論に基づく信念である、(2)心像（mental imagery）の働きである、(3)直接知覚である、という三つの立場が分類できるという。直接知覚説の代表者格が生態学的心理学の J. J. ギブソン[13]である。Nanay 自身は心像説を取るというが、彼女の議論はまったく納得しがたいものであり（[11]（訳者解題 p.44 参照）、花瓶の背面を直接知覚しているというギブソン流の主張には何ら不都合はないと思われるのである。

ミショットの実験でも「観察者」という複数の他者がいる以上、「共通了解」が前提されているではないか、と言われるかもしれない。けれど、実験現象学での「観察者」は、自然科学的実験における「証言者」としての「匿名の観測者」とは性質を異にする。ミショットの実験現象学はフッサールの想像的変更を実験事態に移し替えたものであり（［11］（訳者解題 pp.42-43）、［15］）、そこでの観測者は「可能的自己」とでもいうべきものであって、他者をエポケーしたままの方法的独我論と矛盾しないのだ[1]。

ギブソンはミショットを自らの先駆者として高く評価しているが（[17]参照）、ギブソン以後、現象学的知覚研究は直接知覚説を継承発展させつつある（［18］［19］など参照）。とりわけ、現象学的認知哲学のノエに代表されるエナクティヴ・アプローチは、認知科学の知見に基づいて精緻な議論を展開している。ノエ[20]もアモーダル知覚を論じているので、該当箇所を引用しておこう。

「〔カニッツァの三角形の〕この現象では、心理学者が非感性的知覚〔amodal perception：非様相的知覚〕と呼ぶものの一例である。私たちは、カニッツアの図における円盤の遮蔽された部分を、

[1] フッサールは想像的変更を一人で、つまり方法的独我論を維持したまま遂行しているが、筆者に言わせれば、実験現象学の観察報告であれ質的研究での標本収集であれ、「テクストの一人称的読み」[16] (p.7) によって、それら報告を、他者を現象学的にエポケーしたままの想像的変更とみなし、方法的独我論を維持しつつの現象学研究ができるのである。

知覚の中で非感性的に〔amodally〕現前する者として知覚する。」(pp.93-94)。「私は、猫が柵の向こう側で部分的に隠れていることを見ることができる！これがまさに非感性的知覚の例である。ひとは、視覚から消えていると自らが知覚しているものの現前を経験する。」(p.95)。「トマトの全体性についての私たちの知覚的感覚――大きさや裏側など――は、例えば左から右へと身体を動かすことがトマトのさらなる部分を視界にもたらすだろうという私たちの非明示的な理解(私たちの予期)の内にある。トマトの見えない部分と私たちとの関係は、感覚-運動的付随性のパターンによって媒介されている。同様の点は遮蔽の諸現象に値して広くあてはまりうる」(p.96)。「厳密に言えば、見られていないもの（トマトの背面）が知覚的に現前するという感覚と、見られていないもの（隣の部屋）が（非知覚的に）現前するという感覚との違いは、程度の問題であることが、これらの考察によって明らかになる」(p.99)。要するに、アモーダル知覚も運動知覚の一環として成立するのだし、そもそもキネステーゼがアモーダル知覚を構成するというのが、ノエのエナクティヴ（感覚運動的）なアプローチの眼目となる。

こうしてみると、私たちは生まれながらにして主客の一致を知っていると言ってよいである。にもかかわらず哲学史において主客問題が難問とされてきたのであれば、その「原因」は、歴史的・心理学的に別途追求されねばならないだろう。ちなみに筆者は、主客問題は他者問題から派生したと考えている。

2.3　主客問題は「オワコン」

このように、20 世紀の末から今世紀にかけては、知覚は実在を模した表象であるという伝統的知覚観への「ギブソンらの直接知覚説による批判と挑戦がなされ終えた」[21] (p. 189) と言われるご時世となっており、「主客問題」はもはやアニメ界でいう「オワコン」(out-of-date なコンテンツ）になってしまったと思われてならない。

もちろん西の力説するように、客観的世界の構成を高次化するのに共通了解性は重要であるが、キネステーゼを含むアモーダル知覚を最低限必須の要件とすれば二次的な位置づけになるだろうか。現に、夢でないことは「人に尋ねる」のでなく「ほっぺたをつねる」ことで確かめることになっているではないか。生まれながらのロビンソンクルーソーであっても、客観的物理的世界の初歩的な認識にはさして不都合は来たさないだろう（その代り、有名な Held &Hein の実験で随意運動と知覚変化の連動を遮断されて育った子猫が三次元知覚に障害を来たしたように[22]、キネステーゼの剝奪ははるかに重大な結果をもたらす)。そもそも、客観的世界の認識がすでに成立しているからこそ他者の証言も客観的世界を拡大深化するに当たって信憑性を持つのであって、（西の主張するように）逆だというのはどう考えてもおかしいのではないか。

３.「他者問題」はこれからの問題である

ひるがえって他者問題の方はどうか。なぜ主客問題に比べて他者問題は未開拓なのか。第一に、「背面を備えた眼前の花瓶」に代表される「物が実在する」という事態に比べ、「他者が実在する」という事態の意味が、考えれば考えるほどよく分からなくなり、それこそ西の言葉を借りるならば「共通了解がない」ことが挙げられる。

3.1　発達研究における「物の実在」の基準

物の実在のような抽象度の高い問題を経験的研究に持ち込むためには、「基準」を設定する必要がある。物の実在についての基準は、発達研究でもすでに 20 世紀の前半からほぼ確立されている。ピアジェは、発達的にみて成熟した＜ものの概念＞の基準として次の三つをあげている（[23] (p.53)）。

① ものは、それを観察している人と、共通な空間に存在し、そしてその空間の中を移動する１つの実体であるとみなされていること。

② ものは、人がそれにはたらきかけているときにも、いないときにも、存在を続けていると考えられていること。

③ 自分自身も、他のものの間では、やはり空間の一部を占め、その中で移動する１つの実態であると考えられていること。

そして、1 歳半から２歳という、「感覚運動期の第６段階」に入ると、ものの概念は大人の持っているのと同じものになるという。

この基準の中でも特に②は「ものの永続性」と呼ばれるが、知覚研究に引き写せばアモーダル知覚と同じことになり、近年の乳幼児観察実験技術の進歩によってほぼ生得的と言ってよいことが分かっている。これは生態学的現象学・心理学における直接知覚説の展開と軌を一にしている。

それはともかくとして、上記のピアジェの三つの基準に異を唱える人はまずいないだろう。この基準を超えて「物」とは何かを探求しようとすれば、物理科学に足を踏み入れることになるだけなのだから。

3.2　他者問題の難問性はそれが自他問題であり「自己」の問題であるところにある

これに対して他者の実在信念についての発達的基準を、上記のピアジェにならって設定するのは難しい（後で出てくる「心の理論」研究における誤信念課題が、一時、他者理解・認知の発達基準として有力視されたが、その後心の理論パラダイム自体が批判されるにいたった[1]）。結局のところ、他者問題の難問性は、他者問題とは自他問題であり「自己」の問題でもあることに存するのだ。

発達心理学の麻生武はかつて、子どもの他者理解を研究することは，自分の靴紐を引っ張って自分を引き上げようとするようなものかもしれないと，論じたことがある[28]。暗黙の自己理解・認識に応じてしか、他者を理解し認識することができないからだ[2]。なぜならば、理解し認識すべき他

---

[1] 誤信念課題とは、たとえばバロン＝コーヘン[24] (p.126ff) のサリーとアン課題では、「サリーがおもちゃを籠にしまって外出した後にアンがおもちゃを箱に移します。サリーが戻ってきておもちゃを探すとき、籠と箱のどちらを探すでしょうか？」という人形劇を見せながらの課題で、健常児では三歳以前には自分に取っての現実が即、サリーという他者の現実なので「箱を探す」と答えるが、4 歳になると、自分にとってでなくサリーにとっての主観的現実を理解した「籠を探す」という「正答」が得られる。これに対して自閉症児では、正答が出てくる年齢はかなり遅れる。誤信念課題は統合失調症者の認知機能を調べるのにも用いられていて、統合失調症では心の理論が障害を受けているというデータもある（[25][26]参照）。また、心の理論パラダイムへの現象学からの批判として、柴田[27]参照。

[2] 自己理解と他者理解が切り離せないことについては、最初の数カ月の乳幼児の観察を通じて、レディも「他者意識は自己意識と分かちがたく、おそらく両者は自己−他者−意識（self-other-consciousness）と呼ぶべきだろう」[8]（p.189）と結論している。

者とは常に、「存在論的に自己と対等な他者」だからだ。たとえば自分を物だと理解している人（もしくは場合）にとって、他者は物として理解され認識される。ところが自己を純粋の主観と理解する人（もしくは場合）にとっては、他者理解・認識のハードルは格段に上がる。認識された他者はすでに認識の「客体」であって「主観」ではないので、「本当に他者を認識した」という気がしないからだ。

おまけに、他者理解・認識には（事物の客観的実在の理解に比べれば）個人差が著しいだけでなく、同一個人内の発達過程の上でもドラスティックな変化を遂げ、そのたびに自己と他者の自明性がひび割れることになる[1]。

このような他者問題の自他問題としての難問性は、哲学と心理学における、19 世紀の末から現代にいたるまでの、他者認識・他者理解の問題史での学説変遷にもあらわれているように思う。この点を念頭において他者問題史を瞥見した上で、筆者らの自我体験・独我論的研究を他者問題史に位置づけ、具体的にどのような難問が自他問題に潜んでいるかを明らかにしたいのであるが、コメント論文としての枚数が尽きかけている。いったん稿を置いて、「続篇」[5]として他者問題とその無限の射程を明らかにしていくことで、西の反批判に十全に応えることにしよう。

参照文献

[1] 西研（2019）.『哲学は対話する――プラトン、フッサールの〈共通了解をつくる方法〉』. 筑摩書房.

[2] 渡辺恒夫（2020）. 前門の狼を追い払うため後門から虎を入れてしまった―『哲学は対話する―プラトン、フッサールの〈共通了解をつくる方法〉』（西研 著、筑摩書房、2019）を批判的に読む.『こころの科学とエピステモロジー』*2*, 92-95. https://doi.org/10.50882/epstemindsci.2.1_92

[3] 西研（2022）.「他者問題を正しく立てる」とはどういうことか？――渡辺恒夫からの批判に答える.『こころの科学とエピステモロジー』*4*, 64-70.https://doi.org/10.50882/epstemindsci.4.1_64

[4] 渡辺恒人（1967）. 他人の存在をめぐる論争.『理想（1967 年 11 月号）』*414*, 48-63. https://researchmap.jp/read0027589/published_papers/15768550

[5] 渡辺恒夫（2023）. 他者問題とその無限の射程（続篇）.『こころの科学とエピステモロジー』*5*, 102-117.

[6] 渡辺恒夫（2014）.『他者問題で解く心の科学史――心の科学のための哲学入門２』. 北大路書房.

[7] 西研（2020）.『100 分 de 名著　カント純粋理性批判』〈ＮＨＫテキスト 2020 年 6 月〉. ＮＨＫ出版.

[8] レディ，V.（2014）.『驚くべき乳幼児の心の世界』, 佐伯眸（訳）. ミネルヴァ書房.

[1] 西は、独我論的体験を以って個人の発達が独我論的世界から始まると筆者が主張していると理解しているようだが [3]（p.68 など）、続篇 [5] で見るように、独我論的体験とは自己理解と他者理解の均衡が破れることの体験なのだ。

[9] デネット，D.（1997）.『心はどこにあるのか』，土屋俊（訳）．草思社.

[10] Michotte, A., Thinès, G. & Crabbé, G.（1964）*Les compléments amodaux des structures perceptives.* Publications universitaires de Louvain.

[11] ミショット，A.（2021）．因果性の知覚――序論 第Ⅰ章：問題のありか．渡辺恒夫（訳）.『こころの科学とエピステモロジー』*3,* 13-47. https://doi.org/10.50882/epstemindsci.3.1_13

[12] Nanay, B. (2010). Perception and Imagination: Amodal perception as mental imagery. *Philosophical Studies, 150*, 2239–254.

[13] Nanay, B. (2018). The Importance of Amodal Completion in Everyday Perception. *i-Perception, 9(4)*, 1–16. https://doi.org/10.1177/2041669518788887

[14] Gibson, J. J. (1972). A theory of direct visual perception. In J. R. Royce, & W. W. Rozeboom (Eds.), *The psychology of knowing* (pp. 215–240). New York, NY: Gordon and Breach.

[15] Thinès, G. (1988). The phenomenological background of Michotte's experimental investigations. *Journal of Phenomenological Psychology, 19(1)*, 19-58.

[16] 能智正博（編・代表）（2017）.『質的心理学辞典』．新曜社.

[17] Thinès, G., Costall, A. & Butterworth, G. (Eds.) (2014). *Michotte's experimental phenomenology of perception.* Routledge (Kindle Edition). [Originally published in 1991, Lawrence Erlbaum Associates.]

[18] 田中彰吾（2022）.『自己と他者』．東京大学出版会

[19] 長滝祥司（2022）.『メディアとしての身体』．東京大学出版会

[20] ノエ，A.（2010）.『知覚のなかの行為』，門脇俊介・石原孝二（監訳）．春秋社.

[21] 門脇俊介（2007）.『現代哲学の戦略』．岩波書店.

[22] Held, R., & Hein, A. (1963). Movement-produced stimulation in the development of visually guided behavior. *Journal of Comparative and Physiological Psychology, 56*(5), 872–876. https://doi.org/10.1037/h0040546

[23] 波多野完治（編）（1965）.『ピアジェの発達心理学』．国土社.

[24] バロン－コーヘン, S.（2001）.『自閉症とマインド・ブラインドネス（新装版）』，長野敬・長畑正道・今野義孝（訳）．青土社.

[25] Brüne, M. (2005). "Theory of Mind" in Schizophrenia: A Review of the Literature. *Schizophrenia Bulletin, 31 (1),* 21–42. https://doi.org/10.1093/schbul/sbi002

[26] 池淵恵美・中込和幸・池澤聰・三浦祥恵・山崎修道・根本隆洋・樋代真一・最上多美子（2012）．統合失調症の社会的認知: 脳科学と心理社会的介入の架橋を目指して.『精神神経学雑誌』*114 (5),* 489-507.

[27] 柴田健志（2021）．サルトル他者論から現代発達研究へ至る道.『こころの科学とエピステモロジー』*3*, 58-64. https://doi.org/10.50882/epstemindsci.3.1_58

[28] 麻生武（1980）．子供の他者理解――新しい視点から.『心理学評論』*23,* 135-162.

（2023. 02. 07 受付　2023. 02. 14 受理　編集委員会閲読済）